
みやびな妹カセキな兄様

千路

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みやびな妹カセキな兄様

【Nコード】

N3235T

【作者名】

千路

【あらすじ】

料亭の跡取り息子である明。共に厳しく躰けられた妹の雅が、付き合いいたい男がいると言い出したため、古風な明は妹の相手として相応しい男か否かを見定めようとするが、相手はいかにも今風の頼りなく不誠実そうな男。とてもこのような男に雅を任せられないと明は拒絶するも、明の許嫁の双子の姉である夏樹はその男の肩を持つ様子だった。

第一話 四代目の兄妹

都内某所に軒を構える料亭みやび。

近場でなくとも一部の味好みにその名を知られる老舗料亭だ。風情という時代を通して受け継がれる普遍的な人々の美意識に語りかける我が亭の料理は一部の好事家に受けが良く、長きに渡って上流階級の方々にご愛顧頂いている。

その四代目跡取りとなるのが僕、はるのあきら春野明。

妹と両親は我が一家の必修科目である料理技術の習得と研究に熱心だが、長男にして妹と並ぶほど小柄な僕にはその才覚と熱意は今のところ影も形も見当たらない。いずれはこの料亭を背負わなければならぬのは分かっているのだが、今はまだ学問に励むべきだという両親の考えもあり、それに従う形で僕は高校に通わせてもらっている。

料亭の庭を別角度から眺められる離れのような位置にある我が家は、料亭の敷地内の景観を乱さぬようにと本堂のデザインを踏襲しているため、僕らの過ごす部屋も庭に面した廊下と障子一枚で繋がっている。

早朝。畳張りの寝室から朝焼けと薄霧に包まれたみごとな庭をめでていると、廊下を横切って妹の雅が通りがかった。みやび逆光と朝もやのなかから雅は部屋に踏み込んでくると、学生服のネクタイを締めていた僕にお辞儀と挨拶をしてくる。

「おはようございます、お兄様」

「おはよう雅」

お世ちの黒豆のように艶のある髪に、紅白かまぼこのような血色の良い肌。鼻先の高い悪目立ちする美しさではなく、控えるところは控えた美しい顔立ち。白い服も黒い服も、雅が身につければ礼節整った着飾りになる。

雅の魅力は粗野な人間ほどを惹き付ける。彼等にはこの雅がシヨ

ーウィンドウに飾られた高額の宝石のように縁遠く思えるのだろう。そしてそれが故に彼等は猛り、我が家のしきたりという透明な壁に体当たりをしてくる。

だが、雅の清純はその程度のことです。砕かれはしない。躑しつげとは単に厳しさだけではない。両親、そして兄妹も含めた人間環境そのものなのだ。

雅の鼻先から僕までは、どんなに近づいてもその距離きっちり五十センチ。慣れ親しんだ兄である僕にもこうである通りに、家の外でも慎ましか生活が続けさせている。

さりとて雅も人の子。いくばくかの不摂生はあるだろうと兄として大らかな心持ちでその成長を眺めていたが、その朝の報告はあまりにも唐突なものだった。

我が家の居間に置かれた客用と同じ食卓に朝食が並べられる。大柄の父と小柄の僕があぐらで、共に華奢ぎやしゃな母と雅が正座で席に着いたところで、両親が口を開く前に雅が何事かを申し始めた。

「あの、お父様、お母様？ それからお兄様にも聞いてもらいたいことがあるのですが」

「なんだ雅？」

いつもなら『早くしなさい』とのせつかな父の言葉も今日はない。それだけ雅の様子には、なにか思い詰めたような、そしてそれを振り切ろうとしているかのような感情が見て取れた。

「私、ある方とお付き合いをなさろうと思っていますの」

その言葉に父はおろか、僕の心の中までも凍りついた。なぜって、知らないからだ。雅との交際を許せるような男児は、ことこの地域では一人たりとも出会ったことがない。その気持ちに関しては、父も僕と似たようなものだった。

「雅、なぜ突然そのような話になる」

急に厳しくなった父の口調に恐縮しながらも、雅は話を続けた。その男は雅の学校での同級生で、知人からの紹介で先日顔を合わせ

たのだと言うのだ。出合った当初から意気投合して、との報告をする雅の顔は父に否定されることを恐れてか悲しげであつたが、ともかく双方が正式な交際を望んでいるというのだ。

僕は内心それを訝しがらずにはいられなかった。男としての嫉妬もあつたかもしれないが、なによりも今この世間に、信頼を置いてこの妹を預けられるような男がどんなに不足していることか。雅のまだ幼い瞳で、軽薄な男どもの裏にある感情を見抜けようはずもない。

僕はなにか間違つたことになるのではないかと心配しながらも、「好きにきなさい」と普段とは別人のようなやさしい口調の父に対して、寡黙に徹する以外のすべを持たなかった。

「ああ、知ってるよその話、菅井すがいだろ？」

ホームルームの始まる前の朝の空き時間。高校の教室で、僕の竹馬の友である高村夏樹たかむらなつきがあっけらかんと口にする。僕が雅の件を周りの生徒たちに気取られないかと細心していることなどどこ吹く風だ。

「彼氏くらいできたって当然でしょ。ったく、明の時代錯誤ぶりは無形文化財にでも指定して国に隔離してもらいたいくらいだね」

その若者然とした対応に、僕は夏樹では気づかないくらいにわずかに眉を寄せる。

そもそも夏樹のような他人の影響を受けやすい人種はそれが自分にとつて利か害かをもつと考えるべきなのだ。そのままにしておけば黒く美しいはずだった髪はウェーブのかすんだ茶色に、そして必要も無いのにやたらと短くしている制服のスカート。それで僕の机の上に無造作に座っていたりするものだから他の男子の視線はいやがおうにもそこを避けねばならない。それを面白がる夏樹には責任や美德などを教え込んでくれた先達が誰もいなかったのだろう。

「雅はそういうんじゃないさ、あんまり男とかには興味なかったのに」

「それ本気で言ってるの？ 女の娯楽で恋と無関係なものは皆無しよ。冬樹ふゆきもよくこんな盆栽頭と付き合う気になるよ」

盆栽頭とは僕の髪型をさして言っているのではない。夏樹なりの冗談なのだ。

それよりも、冬樹というのはこの夏樹の妹で、本格的に僕と付き合い始めてもうすぐ一年になる許嫁だ。一卵性の双子なだけに顔はなかなか似ているが、性格は全くの別人だ。昔から僕の家に通っていた冬樹は夏樹のように悪ずれしてはいない。

「まあ、明の好きにしなよ。菅井に突っかかって変な問題とか起すなよ」

夏樹のような問題児に言われるまでもない。

しかし、菅井とはどのような奴だったか。鼯鼠ひしき目に見ても素行優良とは言い難い部類に入っていた気がする。とにかく会いもせず人を決め付けるのは良くない。兄という立場としての責任もあることだし、直接本人に会って話を聞くのが一番だろう。冬樹には悪いが、今日の昼食は彼を誘ってみようか。

2. やばい野郎とあたしの恋路

「おいおい夏樹、やべーって俺」

うざったい授業と、これまたうざったい授業に挟まれた束の間の休み時間。廊下を歩いていると、いきなり背後からなんらかの奇声が聞こえた。それに自分の名前が含まれているというのが悲しかったが、とりあえずは振り向いておく。

「お兄様から誘われちったよおい、初日からー」

言葉の端に軽さを滲ませつつ日照り続きの田んぼのように干乾びた笑みを浮かべてくる細長くて茶色い男がいた。さっき明との話に出てきたばかりの菅井だ。今更ながらその顔を見直して、こいつと雅が付き合ったらどなんにか悲しむ男が多いだろうと想像してみる。確かに本人の口にする単語の通り、こいつが“やばい”という件に関しては否定のしようがない。

「なんだよ、明がなんかやらかしたのか？」

「いやなんてゆーかさ、昼飯に誘われちまったのよ俺」

明の昼食会、か。普段は冬樹と二人だけで仲むつまじくどっかで食べてるらしいけど、そこにこんな場違いな奴を呼ぶなんて妹の保護に随分と本腰を入れているようだ。

「やべえなんか心配、俺ほんとに雅ちゃんときあえんのかなあ？」

「さあね」

普通に考えたら近寄る権利があるだけでも奇跡なんだから、ちつとはあたしに感謝してほしいものだ。

「なあ、お前来ねえ？ 一緒に」

「あたし？ なんで、嫌でしょそんなの」

「いや俺、絶対無理だって」

調子に乗った顔つきのままでそんなことを言われても説得力がない。

「付き合う相手の家族と会うのに、なんで別の女連れてくのよ、お

かしすぎ」

「だって知り合いだろうがよ、お前たち」

知り合い、か。

確かに妹の冬樹が明の許婚だから、あの化石のように古臭い考え方が世界のスタンダードだと信じて疑わない明がその約束を忠実に遂行するであろうことを考えれば、いずれ明はあたしの弟になる予定だ。だからといってあたしは子供の飯事のようなそんな関係がいつまでも続くとは思ってないし、明とは他人として接しておこうと思っている。

「そんなんじゃないよ」

呟いて菅井に背を向ける。

人間の気持ちなんてすぐ変わるものだ。明と冬樹がいつまで今のように仲良くしていられるかは誰にもわからないし、雅だって菅井のような男と付き合い始めて遊び歩くようになれば、あつという間に染められてしまう。今のように箱に囲われて大事にされてるから男たちには宝石のように見えてしまうのだ。

人間の中身なんて、初めから誰もかれも大差などない。

あたしと冬樹がこんなに違うんだから、そうに決まってる。

「おー、じゃあまたなー」

廊下を歩き去るあたしの背後へ菅井が声を投げてきた。まだいたのかこいつ。

不機嫌を表情から消さずに廊下で人波を泳いでいると、急に目の前にあたしがよく知っている顔が飛び込んできた。無駄がないというか、磨いた銀板のようにまっさらで輝いた顔だ。あたしが一方的に、自分でもわからないうちにそれだけを見つめるようになっていた顔。クラスメイトの安藤誠一、あんどうせいいち背も高いし成績も良く、性格も悪くない典型的な目立つ男だ。

もしも雅と並んで釣りあうような男がいるとしたら、うちの学校には安藤くらいか。正直、そうなってしまったらそれは仕方がないと思う。諦めるしかない。でも――

安藤が振り向いた。こちらにはない、別の方向で声がしたのだ。一瞬だけ安藤が目をやった先には南洋の黒真珠、雅——隣にいる兄の明と楽しげに話している、春野雅の姿だった。

それに見惚れていた安藤だが、一目を気にしてか眩しがるようにすぐに顔を伏せる。仕方ないことだ、あたしだってそれくらい理解できないほど馬鹿じゃない。雅は美人だし育ちも良い。男たちに好かれる要素もそろえてる。特に、安藤みたいな恵まれた人間が雅のような女を望むのは当たり前だ。

——でも、悪いけどそれはさせない。

振り返って、まだ目の届く範囲にいた菅井を見つけ、それに早足で追いつがる。

肩で人波を避けながら、その背中に声をかける。

「なあ菅井」

「ん？　なんだ」

不器用な角度に首を曲げて振り向いてくる。

「やっぱり昼、あたしもいくよ」

「お、マジ？　いやありがてー、サポートしてくれんの？」

「ああ、まあな」

そうだ、こいつに任せてちゃ心配だ。

あたしがちゃんと面倒見てやらないと。

「でないと、雅にお前を紹介した意味なくなるしな」

第三話 今どきの男

具合の悪い軋み音をたてて音楽室の入り口である引き戸が開く。校舎の中では比較的古いつくりで木目色の濃いその教室内を見渡すと、そこはいつものように椅子だけが並び、人影なくひっそりと静まっていた。

「うわー、いいんすかマジでこんなところ入っても」

雅が選んだ菅井という男子生徒が、感嘆とも呆れともつかない声を上げる。

「誰も知らないだけで、昼の音楽室は生徒たちに開放されてるんです、ちゃんと先生に確認は取ってあるんですよ」

隣で説明しているのが僕の許婚である冬樹で、いつもは僕と二人だけでここで昼食をとっている。顔は夏樹と似ているが、その声色や雰囲気はまるで別人だ。肩の辺りで短く切り揃えた艶髪に、穏やかだがしつかりした物腰。静かなところが好きだというその性格も、姉の夏樹には見当たらないものだ。

「んじゃ、おじゃましますー」

へんな挨拶だけして溝金をまたぐ菅井。

雅も誘ったのだが、なぜか同席に乗り気ではないようなので連れではこなかった。なにかやましいことでもあるかのような雅の顔を久しぶりに見た。雅が僕たちにどんな負い目を感じているのかは知れないが、僕はただ兄としての勤めを果たすだけだ。

教室の端に並べてある机に、僕と菅井は向かい合うようにして座る。僕の隣には冬樹がいる。

「いやー美人っすねー、夏樹もけっこういけるけど妹さんなんか別人みたいっす」

春先から黒く焼けた破顔を盾に、脈絡も前置きもなくそんなことを言ってくる菅井。夏樹となんらかの交流があるらしいのは僕も知っているが、直接本人の口から聞いたわけではない。こうして遠回

しに言われているだけだ。

「いるか？ 明」

廊下のほうからよく通る声がする。言ってるそばから夏樹だ、ここにくるとはめずらしい。入り口から顔を出して首を振り、僕たちの姿を見つける。菅井の姿を見ても特に驚いた様子を見せないことから、僕が菅井を誘ったことを知っていたようだ。

ずかずか寄ってきて菅井の隣の椅子を引っ張り出し、手持ちの購買パンを三つ机の上に転がす。どれも甘そうな菓子パンばかり。もちろん夏樹自身の昼食だ。僕と冬樹には全く同じ弁当箱が二つ。菅井はコンビに弁当のようなものを用意していた。

「夏樹、またそんなのばかりで。私が明のと一緒に作るって言ってるのに」

それに口をはさむ冬樹の表情は暗い。

夏樹の健康を気遣ったことだろう。

「いいって、毎日明とおんなじ弁当食べるなんて、なんか呪われているみたいだろ？ なぁ」

なぁ、と僕に同意を求めるのは、これまた夏樹のジョークというか趣味というか癖である。

「夏樹が自分で作ればいいんだよ、冬樹に頼らないでさ」

「あり得ないって。あたしがそんなに殊勝だったら、そもそも冬樹があんたの相手する必要はないんだから」

まただ。夏樹はなにか事あるごとに『冬樹は自分の身代わりで明と付き合っているのだ』と言う。確かに僕らが生まれる前に決められた親同士の約束だったから、元々は長女の夏樹が僕の相手だと親からは言われていたのだ。でもまだ子供だった夏樹がそれを拒否したため、こうして僕と冬樹が許婚ということになった。正式に付き合い出したのは中学を卒業した日からだったが、家も近かった僕らは子供の頃からいつもそういうつもりで接してきた。今更、夏樹に冬樹の代わりをしるなんていうのも無理な話だし、誰も望んでいない。僕らの両親も、僕ら自身も。

「双子だろ？ 冬樹が頑張ったからだよ」

隣にいる冬樹がまた恐縮して肩を狭めているのがわかる。褒められて当然のことを冬樹は毎日しているのに、夏樹のような堂々とした態度は見えない。そこがいいと言う人もいるが、僕としては冬樹に自身を持って欲しいと思う。それだけ立派なことをしているんだから。

「僕が言えたことじゃないけど、うちに来るなら料理の勉強くらいはしてもらわないと。菅井君も学校を卒業してからで構わないから、雅と付き合うつもりならそのつもりでいて欲しいな」

「え、なに俺って婿養子確定なんすか？」

「ああ。正直、君の家に雅を嫁に行かせるのは心配だから」

「いやそうじゃなくて、まだ付き合うだけだし……」

「結婚する気がないならどうして付き合うんだ？」

この菅井という男、のらりくらりと話を伸ばしているが、やはり結局は雅で遊びたいだけなのだろうか。最後まで面倒を見る気がないと言うなら、雅がなんと言おうと手を引かせなければ。

「すぐに結論を出してくれとは言わないが、覚悟ができるまで交際は遠慮して欲しいな」

見かねたのか、夏樹が口を挟んでくる。

「明、そういうのおかしいぞ、普通じゃないんだって」

「やっべー、俺だめかも」

大げさに頭を抱える仕草を見せて、机に伏す菅井。

「大丈夫だよ菅井、慣れるもんだろそういうのは、冬樹も今ではこうなんだしさ」

夏樹の励ましの言葉に、菅井が顔を上げる。

「なあ夏樹、ダメだったら一人者同士付き合わねえー？」

夏樹と付き合う――、なにを馬鹿なこと言ってるんだこいつは。

誰でもいいという意思表示か。そう考えるしかないだろう、僕の前でこんなことを言うってことは。

「もうやめてくれ菅井君」

「はっ？」

「悪いけど、君が雅と付き合うのは了解してあげられそうにない」

「な、なんでっすか、まだ全然雅ちゃんと話してないっすよ」

「おい、明！」

急に大声を上げる夏樹。

「雅がこいつがいいって言ってるんだ、それを自分の趣味でどうこう言う権利なんか無いだろ」

「雅が、本当にか？」

信じられない。確かに雅はまだ世間慣れしていないが、こんな男に憧れるほど軽薄ではない筈だ。

「雅が自分の口でそう言ったのか？」

「ああ、そうだよ、それでなんの問題があるんだよ」

きつめに刈りそろえられた眉の下の視線ではっきりと断言する夏樹。

「あ？ そうなの、はは、なんだ、ならいいじゃん俺……」

品のない笑みを浮かべる菅井。死肉にありついたハゲタカのそれのようだ。

「そうか、仕方ない。……なら本人に言っておくから、もう菅井君は雅に近づかないでくれ」

呆れ顔を見せつけてくる夏樹と菅井を前に、僕は食べかけの弁当を仕舞って冬樹と共に席を立った。

4. 暴れダコに黒真珠

本人が決めたことだっというのになんでああなるんだ。これじゃ時代劇か古典文学だ。

「なんか丁寧なのは髪型だけでめっちゃ失礼なやつじゃねー？」

音楽室の帰り道、人の耳も気にせず言い放つ菅井。

失礼さで明の性格と菅井の髪型どっちが上なのかは別として、あなつた明に弁明は逆効果だ。雅も自分の口では菅井に気があるようなことを言っている、明にきつく言われればそのことは口にしないくなるだろう。富豪の付き人のように黙って明と共に席を立った冬樹から文句が出るとも考えられないし。

「きついよなこれは……」

「え、何？ 本人がいいって言ってるんじゃないの？」

呑気に希望的観測を述べようとしていた菅井の肩を、牛皮みたいにながさがさで太い手が叩いた。

「よう、なにお前また女変えたの？」

菅井の肩上にぬつと現れた頭は、まさしくカビの生えたタコそのものだった。湯がいたらさぞ赤くなるのだろう。それが菅井と同類の品のないにやにや笑いを浮かべている。

「あ、海津^{かいづ}さんっすかひびつた。いやー違うっすよ、こいつ協力してもらってるんです、別の女落とすのに」

身体はピクリとも動かずに、タコ目だけが異様な速度でこっちを向く。あたしは獲物かよ。

「ふーん、ならオレもらってもいい？」

「だめっすよまたそれですか、俺ふられたらってことで先約入ってるんですから」

あたしはなんとも答えてないのに、また勝手に話をすすめている菅井。

否定するのも面倒くさい。いっそ貝にでもなりたいが、貝はタコ

の好物だっけ。

「はぁ？　それでお前が狙ってるのって誰なの」

少し不機嫌な様子で尋ねるタコ。そうなると寄った眉の皺が悪役レスラーの覆面の部分みたいだ。

「春野雅っていう女なんですけど知ってます？　なんか俺に気があるらしいんすよ」

「は、お前に？　ばかじゃねーこの妄想野郎」

どうやら、雅の名前はこんなタコでも記憶できるくらい印象の強いものらしい。

「でもあの兄貴とかがしゃしゃり出てきてうざったいんですよ」

雅を知っているのならば、あの時代錯誤の兄のことを知らないことはあるまい。

「ああ？　そういうのってちょっと兄貴ぶん殴ってやれば妹もいなりなんじゃねえ？」

「え、なんすか協力してくれるんすか？」

「はぁ？」

タコがそのぶつとい足で菅井の脚を蹴る。

「なんで俺が？」

もう一度蹴る。制服から空気が漏れる音。

「お前に」

また蹴ってる。菅井の顔が固くなる。

「協力すんだよ、俺のものにするんだっつーの」

「はは、そうっすよね、ってまじっすか！」

と両手を上げて馬鹿げた驚き方をして見せる菅井。

「そっだよ、なんか文句あっかよ」

文句とかそういうんじゃなくてそれは犯罪だろう。

「えーやっぱいすよ俺はどうなるんすか」

菅井も菅井で頼りなくすがりつくような声を出す。

「そっちの女と好きにしてりゃいいだろ」

あたしは補欠ね。随分調子に乗ったタコだ。とりあえず今は黙っ

ておこう。獅子身中の虫、こういう馬鹿は仲間にいるふりをして操るに限る。

「はあ、まあいいんですけど。海津さんに目え付けられちゃったらしようがないっすね」

とか言いながら微妙に嬉しそうな顔をあたしに向ける菅井。こいつもう雅のこと諦めてやがったな。明ごときの障害で諦めるなんてへたれてるにも程がある。代わりにあたしにありつこうって、冗談でもない。

「んじゃ、今日の帰りにでも挨拶にいくかな」

「え？ まじすか、挨拶って橋のところっすか？」

「おう、お前も来っか？」

「ひっでー、いいっすよ俺は」

「おう、じゃーな」

勝手に上機嫌でさってゆくタコ。

その耳が遠くなったあたりで菅井に尋ねる。

「橋ってなんだ？」

「あー、むかつく奴ボコリ専用場所、泣いて謝るまで帰してもらえねーってこと」

「なんだよそれ、なんで明が」

「なんでって言われてもなー、ほら、なんかあいつ自分には関係無いみたいな顔してるじゃん？ そういうのってシメられる運命なわけよ」

なにが運命だ、冗談じゃない。

橋か。人がよく喧嘩してる橋っていえば西地区の太平橋の下。あの辺いつもガラの悪いのがたむろしてる場所じゃないか。それに明と冬樹の通学コースのすぐ傍だ。

「それって、下校途中の生徒を捕まえては橋の下に連れてくんだよな？」

「そうそう、やけに詳しいじゃん」

「いや別に」

そういう目撃談はあたしでなくてもよく耳に入る。ただ偶然そこで喧嘩が起きているだけだと思っていたのだが。

なんとかしないと。あたしのせいでこうなったと言えないこともないんだから。明に迷惑なんてかけられない。

第五話 よくある事

コンクリートの灰色が圧迫感を与える巨大な橋が目の前に迫ってきた。

「だからっ！」

ついに夏樹が僕の腕を掴んだ。厚手の制服の上から濃いマニキュア色の指が食い込んでくる。さすがに僕も足を止めて夏樹を見る、なんだか焦りのようなものが表情に浮かんでいる。

「どうしたんだよ、シヨップिंगモールに行くぐらいでなんで僕が呼ばれるんだ？」

「理由はいいいからとにかく来てくれよ」

強引に僕の腕を引っ張る夏樹に、それまで黙っていた冬樹が口を開く。

「明も、行ってあげたら？ 私は先に帰ってるから、二人だけで……」

なんだろう、おかしい。いつも僕や夏樹と一緒にいる冬樹がこんなことを言うなんて。

「冬樹、なにか用事でもあるのか？」

「いえ、べつに……」

暗い顔で俯く冬樹。

わからない、冬樹が何を考えているのかはわからない、だけど。

「わかったよ、じゃあそうするか」

「えっ？」

声を上げたのは夏樹。少し考えるような間を置いてから、まあそれでいいやと頷く。

「ああ、じゃあ明はもらっていくから、冬樹は変な奴に気をつけて帰れよな」

「なに急に？ 変な人って」

穏やかに笑いながら返す冬樹。

それが、枯れた野太い声にさえぎられる。

「それって俺達のことじゃねえの？」

氷を頬に当てられたように驚いて声のほうを振り向く夏樹。その視線の先には頭全体に無精髭を生やした破戒坊主が立っていた。そしてその後ろには、取り巻きらしい数人の不良グループの優等生たち。

「なんだ君は？」

坊主は冬樹と夏樹をじろりと撫でるように見ると、甘いものを見つけた蟻が顎を開いたように不気味で不器用な笑みを浮かべる。

「こんな美人に囲まれて、随分幸せそうだな？」

「それで、君に何の関係が？」

坊主は僕の視線の外から回りこんで歩いてきて、自分のもののように僕の背に手を回して勝手に肩を組む。じんわりと制服越しに熱が伝わってきて、気持ちが悪い。

「おまえ妹いんじゃない？ そっくらい俺たちにくんない？ ねえ？」

またゴミムシが一匹、雅に目を付けたらしい。

仕方ない、こういうのは懲らしめておくのも兄としての勤めだろう。

「残念だけど君のような奴には雅に近寄ってもらいたくない、諦めてくれ」

「そー言うわけにもいかないよな、ちよつとこっちきてくれよなあ」
僕の肩に回した手に力を入れてくる坊主。後ろにいる他の不良メンバーはけらけらと笑い立てている。そういうつもりなら話は早い。

「冬樹、夏樹を連れて先に帰っててくれ」

暗い顔色で貝のように口をぐっと閉じて俯いている夏樹。

「はい、わかりました。行きましよう夏樹」

冬樹の言葉に驚いたのか顔を上げる夏樹。

「なんで！？ 冬樹あんたまで」

それを黙らせるように夏樹の制服の袖を持って引っ張る冬樹。

「いいから、先に帰ってましよう」

「なんでだよっ！ おい明、ついて行くことないからな。お前らもそんなことやめろって」

坊主に食ってかかる夏樹。強気な声とは裏腹に、その姿は今も腰が引けている。

「お前、菅井の女じゃなかったのかよ？ お前が代わりに俺のものになるんならやめといてやるよ」

その坊主の言葉に反抗するかと思いきや、顔をそらして苦悩の表情を浮かべる夏樹。

「聞くことないぞ夏樹、こんな奴は放っておけ」

僕の言葉にも振り向くようなことはなく、坊主に顔を上げる夏樹。「わかったよ、今日はあたしがいくから明は返してやれよ」

「おい夏樹！」

振り返らずに、僕と坊主の間に割り込んで僕の胸を突き飛ばす夏樹。その思いのほか強い力に僕はかかとを後ろに突き出し、夏樹はさらに坊主に歩み寄る。

「おい、まじかよ。冗談なのにもったいねー」

坊主も面食らった様子でいたが、直ぐに卑猥な笑みを浮かべた仲間たちが囲い込むように僕と夏樹の間に立ち入ってくる。

「夏樹……」

僕の言葉に、不良たちの陰からおずおずと振り向く夏樹。

「邪魔だから、帰ってろ」

僕からの言葉に、焼き壺を割られたように表情を変える夏樹。

「邪魔って、面倒かけてるのはどっちだよこのチビ！」

チビ、か。子供の頃よく夏樹が僕に言っていた言葉だ。昔は僕より夏樹のほうが背が高かったから、なにかとお姉さんぶられたものだ。今では夏樹や冬樹のことは追い越しているものの、やっぱり平均から比べれば僕の身長はかなり低いし、目の前の不良たちから頭一つ上で輝いている坊主を前にした今では尚更だろう。

夏樹がどんな正義感から僕を守ろうとしているにしろ、そんな馬

鹿げた話はない。僕のこと、そして雅のことは僕自身がなんとかしてはならない。それが僕の立場であり責任というものだ。

「夏樹、お前は気にしなくていいから帰れ」

僕が冷淡な声で繰り返す言う、きつと歯を食い縛り、肩までの髪を振るってまた顔をそむける夏樹。

そんな中、それまで黙っていた冬樹が昂然と不良たちをかき分け、坊主の前に歩み寄って行った。面食らう坊主たちと夏樹の前に、冬樹は夏樹の手を掴む。

「夏樹、帰るわよ」

普段柔らかそうな表情とはうって変わって、夏樹に向けられる冬樹の視線は般若のように恐ろしいものだった。姉妹なのにその顔を見た事がないのか、夏樹は生唾を飲み込んでからしぶしぶ頷き、冬樹に腕を引かれて僕のように戻ってくる。

「自宅で待たせてもらうから、無理しないで」

冬樹の言う自宅とは僕の家のことだ。幼い頃からの許婚だけあって、冬樹にとっても僕の家は勝手の通る場所なのだ。

「ああ、なるべく早く帰るから、また雅や母さんには内緒にな」

冬樹は小さく頷いて、そのまま夏樹を引っ張って狭い歩道を抜けていった。

僕が向き直ったころには、にやつきながら路面に唾を吐いたり、ぴゅーぴゅーと口笛を吹いている不良たちの薄汚い顔があった。

6. 頼れぬあの人、頼れるあいつ

「どうしたんだよ冬樹……、まさか警察でも呼ぶのか？」

あの一瞬で吹いた汗がまだ背中ではじめじめしている。まさか冬樹があんな顔をするなんて思わなかった。

「いえ、私はこのまま明の家に行くけど、夏樹も行きましょう」

「なんでっ、いいのかよほっとしても」

「いいの」

いいわけない。冬樹は明に物事を任せすぎだ。あいつはそんなにすごい奴でも頼れる奴でもない。こっちが裏でなんとかしてやらなといったも面倒なことになるんだ。

あたしたちの横を轟音立てて走り去る車の切れ目を見計らい、夏樹の手を振り解いて車道に飛び出す。

「ちょっと、どこ行くのよ夏樹っ！」

冬樹の声を、間を走る車の突風が吹き消した。

「帰ってるからね、明のところには行かないでね絶対っ！」

さらに叫び続ける冬樹を振り返らずに走る。

どこへ行くつもりなんだろう、学校にでもいく気なのか。それとも警察沙汰にでもするつもりか。自分でもわからないけど、とにかく明が連れて行かれたはずの橋の方向を見据えて走っていた。

別に明の事が大切っていうわけじゃない。だけどあんな奴らに好きなようにされるのを黙って見ていられるわけがない。いくら頭の中が生きた化石だからって一応は知り合いなんだからさ。昔から、ずっと昔からの。

まっすぐに伸びた歩道の向こうに、一人の長身の制服姿が見えた。見覚えのある物腰、安藤だ。

まだ遠く、声も届かないような距離だが眼が合った。今なら安藤に話し掛けるチャンスかも知れない。安藤がずっと雅を見ているからって、あたしがそれを黙って別のところから甘受してなきやいけ

ない理由なんてないんだ。

でも、これじゃまるで明のことを口実にして安藤に話しかけようとしてるみたいだ。いや、そんなことを考えるからいけないんだ。

「安藤っ！」

あたしは安藤に向かって走りながら届く限りの声を出した。話はしなくても、名前だけはお互いに知っているクラスメイトという微妙な関係。

安藤はさすがに少し驚いたようだが歩調は緩めずに、やがてあたしの正面にまどくる。

「どうした、高村」

体裁を崩さぬクールな対応、それでいて戸惑ったような表情を相手にも見せつつ――、いや、そんなことを気にしてる場合じゃなかった。汗を払うように首を振る。

「ちょっと、助けてくれないか……」

走ってきたせいで息切れが激しく、細切れに安藤に事情を説明する。

逐一頷きながらあたしの話を聞いている安藤。雅の名前が出るたびに内心の変化が見て取れる自分がなんだかむなしい。

「わかったよ、何ができるかはわからないけど」

「ありがと、じゃあ人呼んできて、あたし明のところに行ってるから」

時間が惜しい、一秒でも早くあの明の減らず口を黙らせておかないと大変な事になりかねない。

あたしは安藤に背を向けて、もう一度車道を駆け抜ける。

「えっ？　おい高村」

安藤もやはりあたしを呼び止めようとするがそれは無視だ、ごめん。

もう一度車道を渡ればさっきタコ野郎にからまれた所。橋の下まではもう目の前だ。

土手の草地を駆け下りてコンクリート橋の影に目をやると、下手な学芸会のように二人を囲んで円陣を組んでいる男たち。真ん中にいるのは明とさっきのタコ野郎だ。

「明っ！」

声をかけるとちらりと一瞬だけこちらを振り向いて、手であたしを追い払うような仕草をする明。どこまで妙な強情を張るんだ。

そのまま橋の影にまで入るとひんやりとした空気が頬に触れてきた。あたしの身体もかなり熱くなっていたようだ。

「観客がきてくれたじゃないか、このほうがタイマンにふさわしいよな？」

言って学生服の上着を脱ぐタコ助。明はそのまま真黒な学生服に小さな身体を包んだまま立ち尽くす。

「待てよっ、どういうことになってるんだよ」

「どうってタイマンだよ、こいつが一人じゃなにもできないんだろなんて言うから、こうして俺一人で相手してやるんだよ、余裕あって格好いいだろ？」

馬鹿か、こいつら。とにかく時間を稼ごう。

「タイマンって、ルールでもあるのか？」

「はあ、んなもんあるわけねーだろ」

「それじゃ明が勝てるわけないだろ」

「そんなの知らねえよ、勝てると思ってるからやるんだろ？　なあ」
明は何も言わずに黙ってタコ野郎のことを見据えていた。その度胸は褒めてあげたいけど、もうすこし臆病でいてくれたほうがこっちがやり易いのにな。

「高村っ」

また、今度はあたしの後ろからこの場を呼ぶ声がした。

安藤だ、早すぎる。あいつもしかして。

「安藤っ、なんで……」

人を呼びに行かなかったのか——そんなことをこのタコたちの前で言えるわけがない。

安藤の顔を見て一斉にあざけりの声を強くする不良たち。

「なんだ、またボコられたいのか安藤ちゃんよう」

「い、いや、そうじゃなくて……」

あたりを見回して、なんだか腰の引けた感じの安藤。

また、ってこいつもしかして。

「春野さんは？」

「春野？ 雅ならここにはいないけど」

「え、だって春野さんが乱暴されるって……」

雅目当てでここに来たのかよ。なんて奴だ、二枚目台無しだ。

「もういいだろ、そろそろ始めよう」

明が静かに口を開く。

「はぁ？ だったらそっちからかかってこいよ」

はあはあと同じことばかり繰り返す奴だ、耳がないのかこのタコは。

などとあたしが心中で悪態をついている最中だった。

明の背が落ちたかと思った瞬間、突然ダッシュした明がタコの顔に側面から殴りかかっていた。

何とか首を引いてかわしたタコ野郎。いや、タコ野郎が避けたのではなく、途中で拳を引いた明がさらに踏み込んで横から重心の乗った蹴りを見舞っていた。

ゴムタイヤを叩いたような重い音と無様な呻き声がしてタコ野郎がその場に膝を崩してうずくまる。

明とタコ野郎の身長差は一瞬で入れ替わってしまっていた。

あたしはおろか安藤や他の不良たちも啞然としてそれを見届けていた。タコ野郎はなんとか顔を上げて憎々しげな視線を叩きつけるが、明に殴りかかるような素振りは見せない。

そんな中、不良の一人が仲間に耳打ちしているのが聞こえた。いや、聞こえるように話しているのかもしれない。

「なあ、こいつ。もしかして東高の西寺に勝ったっていうチビなんじゃないか？」

なんだよそれ、西寺って誰だ。勝手な話しやがって。でも東高といえど不良が多いと有名なところじゃないか。そんな学校で名前が通るような奴に明が勝ったっていうのか、信じられない。

「やっべ、これ一人じゃ無理っぽいぜ、やるか？」

相談を始めた不良たちにちらりと視線を向ける明。

「それはそれで構わないが、雅のことはあきらめてもらうぞ」

顔を見合わせて、明を取り囲む円をさらに小さくする不良たち。

タコ野郎はなんとか立ち上がると、少し離れたところで指の骨を鳴らしている。

「約束は破るなよ、僕を殴るのは勝手だが雅には手を出すな。夏樹、あとはぐだぐだだからもう帰ってろ」

「帰ってろって、そんなこと！」

「もう終わったんだよ」

終わったって、なんだよ、なんのためにあたしが来たんだか。

「高村さん、行こう」

「おい待て安藤、お前もちょっと見とけよ」

むかつくくらい紳士的にあたしの肩を押してこの場を去ろうとした安藤をタコ頭が止める。

下っ端の不良たちが次々と明の制服に掴みかかり、明らかな体格差と人数差でその場に押し倒される明。

明はのしかかる数人の不良たちともみくちゃになりながらも、こちらに目を向けてきた。

なんだよ、そんな顔されたら見てられないじゃないか。

第七話 歲月の違い

冬樹が慣れた手つきで救急箱から取り出したガーゼを僕の二の腕の傷口に当てて包帯で巻きつける。なめらかな手つきで僕の傷口が痛まないようにそっとだ。そばでは夏樹がむくれた顔で畳の上に座り込んでいる。

「まったく、喧嘩ができるならできると言えよな」

「言いふらすようなことじゃないだろう。どの道、怪我をしないってわけじゃない」

「夏樹もあんまり人に言わないでね」

なれた手つきで包帯を縛りつける冬樹。そこに今朝のように僕の部屋の前を通りがかる雅。

「えっ？ あ、お兄様どうしたんですかそれは！」

僕の腕に巻かれた白い包帯を見て飛び上がりそうな声を上げる雅。雅は隣にやってきて座り込むと、僕の腕を親の形見でも扱うようにして柔らかく両腕で包み込む。

雅には知らせたくなかったが仕方ない。それよりも昼間の菅井という男のことは諦めさせなければ。あの坊主頭といい、ああいった輩にはやはりろくなのがいない。

「それより雅、今朝話した男の事だが、菅井と言うんだろう？ ああいった男と付き合うのは感心しないな」

「いえ、いいんです。お兄様がそう仰るんでしたらもう関わりませんので」

なんの執着もなくあっさりと言ったのける雅。

良かった、これで当面は雅に関する心配はなさそうだ。

「雅、なんでそんなに簡単に……、付き合いたいって自分で言うってじゃないか」

夏樹が怪訝そうに雅に尋ねる。

「え、ええ、まあ……」

言いよどむ雅を前に、冬樹が一人で小さな笑い声を漏らす。

「夏樹や明にはわからないよね」

冬樹のほうを見ると、なんだか冬樹と雅が示し合わせるような視線がくすぐったかった。

まあいいさ、今はこれで。雅も冬樹も夏樹も、みんな一緒に笑っていられるんだからさ。

「ほら、これ」

昼休みの音楽室、夏樹がなにやら恥かしそうに横を向きながら差し出したのは、いつも冬樹が僕のところに持ってくるのと同じ紫包み。

「今日は夏樹が明の分のお弁当をつくったんですよ」

目の前で席についていた冬樹が顔をほころばせて、おかしそうに笑いながら言う。

「たまにはこういうのもいいだろ、なあ？」

顔をそらしながら、僕の表情を確かめるようにちらりと上目づかいにこちらを見る夏樹。

「ん、ああ、そうだな……」

少し喉の奥が乾いたままで声を返して、包みを受け取る。

夏樹の料理を食べるなんて、雅と四人でそこらじゅうを駆け回っていた子供の頃以来だ。

昔、夏樹がつくった料理を美味しくないと言ったら壮絶に暴れられたような記憶がある。今さら高校生にもなってそんなことで癇癪を起こしはしないだろうが、これが一種の冒険的要素を孕んだ紫包みであることは疑いようがない。

はたから様子を見ている冬樹はもう遠足に出向く前の子供のように笑みを絶やさずにいて、事の張本人である夏樹はなんだか居心地悪そうに窓の外などに目を向けている。なんにしても、覚悟を決めるしかなさそうだ。

いつもより堅い包みの縛りを解いて、冬樹のものと同じつやつや

した黒蓋の弁当箱を開ける。中から雑多な混じりけのある匂いが漏れてきて鼻孔に居座る。水分多可気味の白ご飯がスペースの半分を占めていて、残りは山菜の煮合わせや芋の煮転がしなどが満員電車を上から眺めたようなぎゅう詰めになっている。

出来のほうは別として、おかずは冬樹が得意な料理ばかりだ。

夏樹のやつ、さては冬樹にそのまま教えてもらったな。自宅の台所で冬樹の師事を受けながら、不器用な失敗をするたびにいらついている夏樹の姿が目に見えかぶ。

「なにしてるんだよ」

手を付けない僕に、不機嫌顔の夏樹。

「いやいや、食べるよ。頂きます」

弁当箱の前で手を合わせてから、無理矢理に箸を進ませる。ねっとりとした白米はその感触の時点でいまいち食欲をそがれるものがある。勢いで口に運んでそしゃくしてみるのが、噛めば噛むほど水分が滲んできて僕の口にはどうも合わない。冬樹だったら僕好みくらい知っているはずなのに、そういうところを教えていないというのもまた一種のいやがらせだろうか。

「あんたさ、昔は喧嘩弱かったんだって？」

そっぽを向いたままの夏樹が、僕の箸の進みの悪さを見てか訊いてくる。

「ああ、夏樹の知っての通りにな」

喧嘩を売られやすい体質ではあったらしい。弱く見えること、孤立していること、その他にも不良たちが僕に喧嘩を仕掛けようという理由には昔から事欠かなかった。極めつけが雅の存在だ。

そんな時にどうするか。

負けてもいい、逃げないこと。それが父からの教えだった。

その度に冬樹が僕の手当てをしてくれた。それはもう子供の頃からだったから、初めの内は涙を流しながら救急箱を抱える冬樹を見て、誰にでも負けるような情けない許嫁でさぞかし恥ずかしい思いをさせたらうと心苦しくもあった。

それでも冬樹はずっと僕の傍にいてくれた、いつもいつも泣きそうな顔をしながら。

今思うと、冬樹だって昔はそれしかできなかったような気がする。

「あたしと違って、冬樹にはあんなにしかないからさ」

「ん？ 何がだ？」

「いくらボコられても学習しない馬鹿だって、ずっと甲斐甲斐しく世話を焼くしかできなくて、ようやく喧嘩が強くなった頃に別の女に奪われましたーだなんて、そりゃないわー、ってね」

「それは、わたしの不戦勝ということで構わない、ということよね夏樹？」

口元に手をやって上品に、だが不敵に笑う冬樹。

「あたしはねー、こんなチビ助の気を引くために料理やり始めたんじゃないの、もっと別の男をね」

「まあ、夏樹が本気でも負ける気はありませんでしたけど」

「はん、そんな底辺争いなんてあたしはしないの」

勝手に話を進める二人には悪いが、そちらの話への注意が散漫にならざるを得なかった。

「この弁当、見た目より美味しいな」

夏樹への褒めの言葉を口にする間もなく箸を動かしていたことに気がついて申し訳なくなる。

「へ？ そ、そう？」

「ああ、冬樹のとはちよつと味付けが違うけど、これもいいな」

普段のと違う味だったから自然と舌が喜んでいたのだろう。あまり褒められた歯触りではないが満足と言うに値する食事ではあった。

「じゃ、じゃあさ……」

なぜだか照れたような仕種で頬をかいている夏樹。

「冬樹のと、どっちが美味しい？」

「え、どっちって」

考える素振りを見せるまでもない。

答えを待つのがもどかしそうな夏樹に、冬樹は笑っていた。

「冬樹のに決まってるだろ」

相変わらず、なぜだかはわからない。

夏樹が突然暴れ出すのだけは、子供の頃とあまり変わっていないようだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3235t/>

みやびな妹カセキな兄様

2011年6月21日02時25分発行